
クモ基本 60

Spider Life

改訂版



東京蜘蛛談話会

はじめに [introduction]

東京蜘蛛談話会では年4回のクモ観察会を行っているが、そこで話題になることのひとつが簡易なクモ識別図鑑が欲しいということだった。新海栄一・高野伸二『クモ基本 50』（1987年、森林書房）は版元が無くなって絶版・品切になってしまった。新たにクモを選定し直してクモ識別図鑑を作ろうという計画が浮上したのは数年前のことである。

基本種の選定を経て談話会会員の生態写真を募集し、過去の談話会会誌等の生態情報を盛り込んで、ここに『クモ基本 60』を発刊する。

今回の作成にあたって念頭に置いたのは英国蜘蛛学会のウェブ・ページにあるクモ・データである。データに基づき成体雌雄の出現時期・发育段階・生息環境・採集法などが表示されている。

本書では過去14年間10ヶ所の関東地方での観察会のデータを基に記録率60%以上のクモから60種を基本種に選定した。ただし、屋内性など一部には記録率が低い種もある。生活史を示すグラフは観察会のデータを基に作成した。グラフの縦軸は観察会での成体記録の割合であり、9は九割という意味である。

基本種の隣には関連種を配置した。生態情報は『クモ基本 50』の新海の解説のほか、主に池田ほか編『クモ生理生態事典』（2011年）に依った。網型・生息場所・繁殖習性（求愛・卵囊など）・令数等をデータのある限り記述した。成熟季節はオスの出現時期とピークを基本にした。秋は8月後半からとする等、

二十四節季を参考にした。出典の詳細情報はウェブ上の『クモ生理生態事典』にある。

和名および科名に関しては新海栄一『日本のクモ』（2006年、文一総合出版）に依拠した。学名はCD『日本のクモ』（2012年）を参照した。

身近なクモ30種をルーペで見ながら正しく知ることができれば、もっと詳しい図鑑や参考書を用いて自分で勉強できるようになる。そのためのきっかけが本書であって欲しい。珍種探しではなく、普通種の生きざまを知ることと Spider Life、クモのいる生活を楽しんで欲しいと思っている。

編集スタッフ

- 監修 -

新海 栄一

- 編集 -

池田 博明 仲條 竜太

初芝 伸吾 甲野 涼

- 写真 -

浅間 茂 新井 浩司 安藤 昭久

池田 博明 石田 岳士 腰高 直樹

莊司 康治郎 新海 栄一 谷川 明男

高橋 登 高野 伸二 千国 安之輔

初芝 伸吾 伴 満 水野 恵

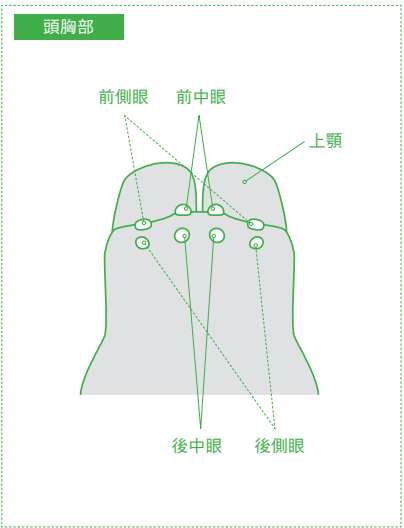
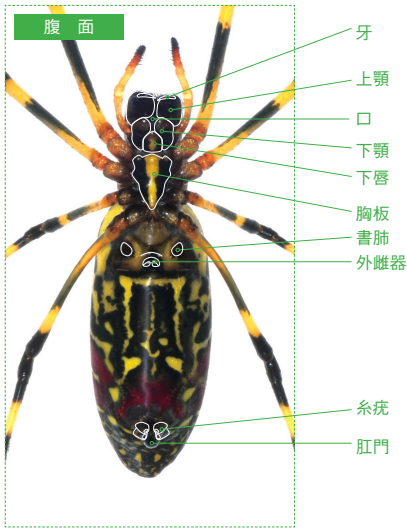
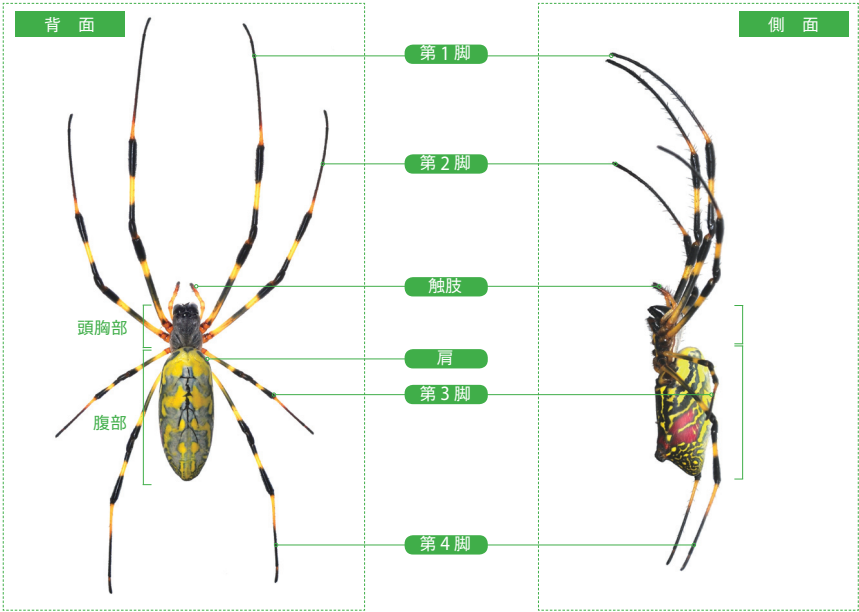
水野 碧 森田 剛則 山崎 茂幸

(1種の提供者は該当箇所にフルネームで記した)

- デザイン -

中 敦郎

体を表す用語



クモの生態や行動に関する用語と引用文献

円網の構造を指す用語は別図に記した。円網以外の網の糸を表す用語はそれぞれの種の解説で記した。

亜成体 成体になる直前の齡。

糸疣 いといば又はしゅうと読む。クモの腹部後端にある出糸器官で各一對の前疣・中疣・後疣から成る。糸疣上には吐糸管があり糸腺につながる。

外雌器 メスの交尾器官で、一對の交尾孔がある。成体ではキチン化して硬化したり色づいたりする。殻皮を通して内部の交尾管や受精嚢などが見える場合もある。

ガード オスがメスをそばで「守る」行動や母親が卵嚢を「守る」行動。徘徊性種の母親の多くは卵嚢の上でガードする。

交接 本書では「交尾」と表記している。

交尾 オスが触肢の移精針をメスの外雌器交尾孔に差し込むこと。以前は交接と呼んだ。

交尾栓 交尾後にメスの交尾孔をふさぐオスの道具。触肢の交尾器の移精針が取れて栓となる場合（コガネグモ科）やにかわ状物質を詰める場合（シロカネグモやクサグモ）がある。行わないクモも多い。

篩板 糸疣とは別にこまかい糸を出す出糸器官。篩板の有無は分類上重要である。

篩板糸 軸糸に丸いパフを作るこまかい糸。

出囊 クモの幼体が卵嚢から脱出すること。母親が卵嚢をかみ破って（開嚢して）出囊を助ける種類と幼体が自力で脱出する種類がある。

触肢 第1歩脚より前に付く付属肢で、オスでは交尾器官となり、精網上に生殖孔から出した精液を吸い上げて保持している。

成熟季 多くのクモでオスの成熟のほうが时期的にメスより早い。求愛・交尾期も考慮した。ナミハグモはメスが先に成熟する。

性的二型 雌雄で色彩やサイズが異なること。クモでは一般にオスが小形。

成体 最終脱皮を終えて親になった状態。雌雄とも生殖器官が完成する。

精網 成体になったオスで作る小さな網で、触肢に精液を吸い上げるために使う。

梳系（そし） 本書では「篩板系」と表記している。

体外消化 とらえた虫に口器の顎葉から唾液を、食道・吸胃に続く中腸から腸液をかけて口もとで消化し、溶かして吸い込む。

脱皮 成長に伴って体を囲む外殻を脱ぎ捨てること。

粘球 横系の軸糸に付けられた粘液が表面張力で丸くなったもの。餌捕獲に使用。

ふ化 卵から子グモが生まれること。

保育網 キシダグモ類の母親が出囊する子グモ用に作る網。子グモは保育網内でまどいをする。

まどい 出囊した幼体が一時的に作る集団。

幼体 成熟前の成長途上の子グモのこと。クモは不完全変態で、脱皮して成長する。脱皮ごとに齡数が増えていく。卵からふ化した子グモを1齡幼体とすると、一回目の脱皮を卵嚢内で行い、2齡幼体となって出囊、まどいを行う。二回目の脱皮を行って3齡幼体で分散するというクモが多い。ウツキコモリグモは卵嚢内で3齡幼体となってから出囊する（母親が開嚢して出囊可能）。出のう幼体を1齡とすべきだとする見解もある。

卵室 産卵のための住居。フクログモ類は葉を巻いて作る。ハエトリグモは卵室にこもって産卵するため卵嚢を作らず薄い糸で被うものが多い。

卵嚢 卵を糸で保護した袋。種により形や色彩が特異的。

【引用文献】

池田博明・桑田隆生・新海明（編），2011．「クモ生理生態事典」ウェブ上より．

小野展嗣（編），2009．「日本産クモ類」東海大学出版会．

新海栄一，2006．「日本のクモ」文一総合出版．

その後の事項は主に「東京蜘蛛談話会会誌」Kishidaia および「東京クモゼミ報告」より．

1
19



Photo: 森田



Photo: 谷川

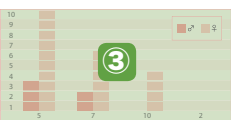


Photo: 森田

ギンメッキゴミグモ

銀鏡金鹿芥類 *Cyclosa argentea* Str. 1906

コガネグモ科

【観察ポイント】 垂直網の中心で頭を上にして占座する銀色のゴミグモである。銀色部分(腹部)は変異が、銀色と黒色部が半々の個体や、全体黒色のものも見られる。

【分布】 都市部の公園から山地まで見られる普通種。網の中心部に直線状の隠れ帯をつける。また、幹系網にも白い糸をつける個体も多い。

【網性】 多様な隠れ帯をもつ円網で網径11cm～24cm、縦糸33～74本、ヨコ糸25～72本【分布】【生活】年2化。

9 割合 10 網性

雌雄 春夏秋 春 3.5 ~ 7 mm 秋 約 3 ~ 4 mm

垂直円網

【トピック】 網は上半分が大きく、刺激に対する反応開始時間は上の刺激に対しては2.60秒、下の刺激に対しては4.79秒と、上に対する刺激が早い。ただし、上についた虫は網から落ちる。【類縁】 秋元雄郎・秋元昇、類似種オオクマギンメッキゴミグモ *Cyclosa okumae* Tanikawa 1992 (♀ 5～6mm、♂ 4mm) は福岡県の標本で記載された小型種だが、北海道と熊本県にも分布、他地域では未記録。

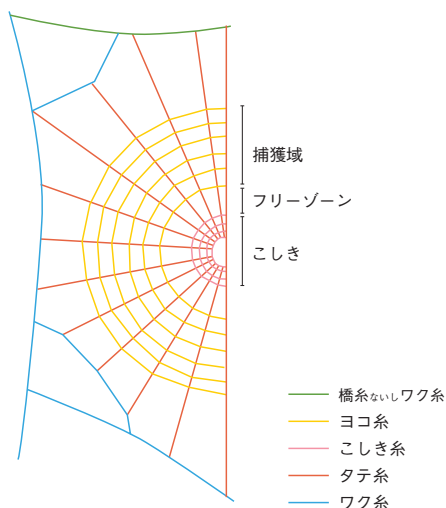
① 基本種 No(基本種 60 種を成熟時季によって 4 部に分け、部の中では網性の順に並べた。巻末に和名で「索引」を用意している) ② 基本種写真(会員からの投稿等を基本に種の特徴をよく表す写真を選抜した) ③ 成体時季データ(約 10 年間の 10 ケ所での東京蜘蛛談話会観察会での成体記録数。ギンメッキゴミグモの場合には 5 月には♂が 3 ケ所、♀が 10 ケ所で記録されたことが分る) ④ 基本種の識別ポイント ⑤ 和名 ⑥ 漢字で表した和名 ⑦ 学名 ⑧ 科名

⑨ 観察会 10 ケ所で記録された割合 ⑩ 網性を表したマーク(垂直円網、水平円網、立体円網、同心円網、不規則網、棚網、受信糸網、篩板糸網、皿網、条網、徘徊性、地中性) ⑪ 成熟時季(オス成体出現時季を重視している。5 月春と 7 月夏に記録された) ⑫ 成体体長 ⑬ 観察ポイント(識別する際の形態・色彩・分布などの特徴) ⑭ 習性(生息環境・生態・網性・生活史・産卵など) ⑮ トピック(興味深い話題・学名の由来など)

目次 [contents]

扉	1
はじめに	2
体を表す用語	3
クモの生態や行動に関する用語と引用文献	4
本書の使い方	5
目次・網を表す用語	6
第1部 季節を問わず成体が見られるクモ	7～42
第2部 春に成熟するクモ	43～88
第3部 夏に成熟するクモ	89～130
第4部 秋に成熟するクモ	131～139
和名索引	140～142
あとがき	143

網を表す用語



垂直円網には造網行動と円網構造を考慮した名称が付けられている。「橋系」は最初に造網のきっかけとなる系で、クモは流した橋系を往復して丈夫にする。「ワク系」と同時に「タテ系」を張り始め、タテ系を次第に増やしていく。タテ系を張り終わると網の中心に「こしき系」を張り、それを外側に向かって広げて「足場系」を張っていく。足場系を外周まで張り終わると、今度は外側から内側へ向かってらせん状に「ヨコ系」を張る。このとき足場系を切るので、完成した円網には足場系が見られない。ジョロウグモは足場系を切らずに残している（粘球のないヨコ系風の系が足場系である）。ヨコ系には粘着物質が塗られ、粘着物質は表面張力で粘球となる。最終的にクモは中心に戻ってこしきを作り直す。橋系・ワク系・タテ系は大瓶状腺、足場系は小瓶状腺、かくれ帯はブドウ状腺、ヨコ系の軸系は鞭状腺、粘球は集合腺の系で作られる。水平円網の場合も同様である。